

矢木毅著『韓国・朝鮮史の系譜 一民族意識・領域意識の変遷をたどる』（塙書房、2012年3月）

中野耕太

1. はじめに

2001年に行われた北朝鮮による高句麗壁画古墳群の世界遺産への登録申請や2002年から始まった中国における「東北工程」などを発端として、2003年頃から高句麗史の帰属をめぐる中国と韓国の論争が盛んになった。いわゆる「高句麗論争」である¹。この論争は単なる学問上の対立にとどまらず極めて政治的な色彩を帯び、中韓両国の歴史観の問題点が脚光を浴びる結果となった。

一国史的観点からの脱却や近代国家概念の相対化を基本的な目標として掲げてきた現代の日本の歴史研究者たちにとって、自国中心のかつ現在の国家概念をそのまま過去に適用しようとする中国や韓国の歴史観は当然に批判的検討の対象となった。矢木毅氏による本書もそのような批判的検討の一つであり、「高句麗論争」の一方の当事者である韓国の歴史観の変遷を浮き彫りにすることを目的としている。

著者である矢木氏は本来高麗・朝鮮時代の政治制度史を専門とする研究者であるが、そのような研究と並行して、「朝鮮前近代における民族意識の展開 一三韓から大韓帝国まで」（夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』2007年）と「近世朝鮮時代の古朝鮮認識」（『東洋史研究』67-3、2008年）という二つの論文を書いており、これが本書の原型となっている。

本稿ではまず本書の内容をかいつまんで紹介し、次に本書から見えてくる朝鮮史研究上の課題について述べてみることにしたい。

2. 本書の内容について

本書は矢木毅氏による二冊目の単著であり²、初の一般向け書籍である。政治制度史を専門とする著者があえて本来の専門とは異なる分野に踏み込んだ理由は、著者自身が終章

1 論争の経過については〔金光林 2004〕、〔井上 2013〕などを参照した。

2 最初の単著は『高麗官僚制度研究』（京都大学学術出版会、2008年）。

で述べているように、韓国と中国の歴史論争、いわゆる「高句麗論争」に対して著者自身の意見を表明するためであったと考えられる。著者は「高句麗論争」を、「近代国家成立以前の領域に近代国家の領域観を押し付ける、極めて不毛な論争（本書260頁）」と断じ、そのような不毛な論争を止揚するために、民族意識・領域意識が決して不変のものではなく、時代につれて変わり行くものであることを本書によって示そうとしている。

本書は、民族意識・領域意識の変遷という観点から、韓国・朝鮮の古代から現代までの歴史を描き出そうとした一種の通史であり、次のようにその章立てもほぼ時代順に並べられている。

- 第一章 朝鮮史の幕開け
- 第二章 三韓から三国へ
- 第三章 北進政策の展開－高麗時代（Ⅰ）
- 第四章 檀君神話の誕生－高麗時代（Ⅱ）
- 第五章 古朝鮮の継承－朝鮮時代（Ⅰ）
- 第六章 間島への道程－朝鮮時代（Ⅱ）
- 第七章 大韓帝国の夢
- 終章 歴史観の相克

著者は朝鮮史における民族意識の系譜として、次の三つを想定している。一つ目は平壤を中心とした朝鮮半島北西部に拠った勢力であり、箕氏の末裔を称していた「朝鮮」の系譜である。二つ目は、中国東北部から南下して朝鮮半島北西部に拠点を移していくことになる「高句麗」の系譜である。そして三つ目は漢江以南に住む民族であり、「三韓」という部族国家群を作り上げた「韓」の系譜である。この三つの系譜が相互に絡み合いながら、朝鮮史が展開していく過程を本書は生き生きと描き出している。

まず著者が注目するのは朝鮮半島北西部の箕氏朝鮮・衛氏朝鮮などの勢力であり、これは漢の四郡設置後には楽浪郡の支配を受け、箕氏の末裔意識を有したまま漢人との同化が進んだ。次に北方から高句麗が朝鮮半島に勢力を伸ばし、西暦313年に楽浪郡を滅ぼすと、箕子の末裔意識を有した楽浪遺民たちは遼東・遼西方面へと撤退し、箕氏伝説を西遷させた。著者によれば、これがのちの「箕氏の東遷」伝説を生んだという。

高句麗が朝鮮半島北部を領有してさらに南下の構えを示すと、南方の韓族もそれに対抗して国家形成を進めた。その代表的な勢力が新羅と百済であり、特に百済は高句麗に対抗するために高句麗の建国説話に百済の建国説話をつなぎ合わせ、高句麗と同様に自らを扶餘の系統に位置づけた。

高句麗・百済・新羅の三国の角逐は最終的に新羅の勝利となり、新羅は朝鮮半島初の統一国家となった。著者はこの新羅の統一こそが「朝鮮民族（韓民族）の歴史的・民族的な

枠組みを定めた真に画期的な出来事であり、それによって今日につながる韓国・朝鮮の人々の「民族」としての枠組みがはじめて確立したといっても、決して過言ではないであろう。（本書70頁）」と高く評価している。

新羅末期に朝鮮半島中西部の開城を拠点にして自立した王建は、朝鮮半島の統一事業を推進するために女真人から安定的に馬を入手する必要があった。彼は女真人の馬の貢納を促すために自ら高句麗の継承者を標榜し、高句麗にならって国号を「高麗」とし、北進政策を推進した。しかし高句麗継承意識は高麗だけでなく渤海人、女真人にも受け継がれていた。著者は「国初以来の「北進政策」によって、高麗の領域はひとまず鴨緑江下流域にまで北上したが、それは当時の渤海人・女真人の目からみれば、あくまでも「新羅」が高句麗の旧領を侵蝕していく過程にすぎなかったのである。（本書110頁）」と述べ、高句麗継承国家としての高麗の立場を相対化しようとしている。

高麗中期に女真人が金を建国すると高麗はこれに服属したが、かつて属民視していた女真人に服属する事は高麗にとって屈辱以外の何物でもなく、高麗のナショナリズムが高揚する契機となった。このような高麗ナショナリズムの高まりの中で、民族の始祖としての檀君神話が誕生したと著者は主張している。

高麗を滅ぼして新王朝を建国した李成桂は、前朝が支配の正統性の根拠としていた高句麗よりももっと古い、檀君朝鮮・箕氏朝鮮の系譜を受け継ぐことを目指し、国号を「朝鮮」とし、檀君伝説ゆかりの地である漢陽（現ソウル）に遷都した。

朝鮮王朝の領土は大体鴨緑江と豆満江を北限としたが、高麗時代の尹瓘の征服地が豆満江以北に広がっていたとする認識が朝鮮では広く共有されており、その後の領有権主張の素地となった。19世紀後半になると朝鮮の民が東北部国境の川、豆満江を越えて間島や沿海州などに移り住むようになり、朝鮮政府が清朝に対して間島の領有権を主張するようになった。その結果、1885年と1887年の二度にわたって朝鮮は清朝と国境画定のための談判（勘界）を行うが、朝鮮側の領有権主張は受け入れられなかった。

朝鮮は1897年に皇帝国としての「韓」という一字国号に改定して「大韓帝国」となり³、再び間島の領有を目指すが、日本による外交権接收によってその計画は頓挫した。その後、1909年の日清間における「間島協約」や1962年の中朝間における「中朝境界条約」においても間島地域に対する領有権主張は受け入れられなかった。このことに対する朝鮮側の不満は、とりわけ国境画定に直接関与できなかった南の韓国の方で顕著であり、このような不満が中国と韓国による「高句麗論争」の素地になったと著者は推測している。

以上が本書のあらましであり、ほぼ全編にわたって民族的系譜意識と領域意識が誤謬と

3 著者によれば「皇帝」の「天下を有つの号」は一字でなければならなかったため、高宗は皇帝に即位するにあたって「朝鮮」という二字国号から「韓」という一字国号に改めたという。「大韓」の「大」字は「大元」や「大明」などと同じ単なる尊称に過ぎず、実質的に意味を持つのは「韓」字だけであるため、「大韓帝国」は一字国号の帝国であると見なせる。（本書235～239頁）

曲解にもとづいて変遷していく過程を追跡している。著者はこの誤謬と曲解が入り混じった難解な史料状況を、論理的に解釈・整理しており、納得させられる部分が多かった。

特に、朝鮮半島を一つのまとまりとする国家や社会が成立したのは新羅による半島統一以後のことであり、韓国・朝鮮の歴史を基本的に南の「韓」族による北進の歴史であったと見る本書の見解に筆者も同意したい。現在の韓国の歴史学界が自明視する「韓民族（朝鮮民族）」という概念は、新羅の統一以後に段階的に形成されていった歴史的産物であり、それ以前の歴史（例えば高句麗）にそのまま適用する事はできない。それゆえに、高句麗史を中国史に帰属させるのか朝鮮史に帰属させるのかという二者択一式の「高句麗論争」は不毛な論争にならざるを得ないのであろう。

筆者は本書の見解に同意する部分が多いものの、いくつかの考証については多少強引に感じられる部分があった。特に「箕氏東遷」伝説が箕氏の末裔意識を有した人々の「西遷」によって生み出されたという見解は、本書の目玉の一つであるが、そう断定できるほど確実な事実であろうか。可能性の一つとして提示するにとどめた方がより妥当な態度ではないかと思われる。特に、著者が自説の根拠の一つとして主張する、『魏略』の秦開関連記事が『史記』匈奴伝の秦開関連記事によって創作されたという見解⁴には疑問の余地が残る。

3. 「満鮮史」から何を受け継ぐべきか

筆者が本書の中で最も印象に残った点は、著者が戦前の「満鮮史」研究を高く評価していることである。著者は本書巻末に附された「参考文献」の中で次のように述べている。

右は戦前・戦後における「満鮮史学」の代表的な著作。その研究成果は以後の歴史研究の基準となり、今日広く用いられている譚其驥主編『中国歴史地図集』全八冊

4 著者は箕子朝鮮の本来の領域が遼東・遼西に広がっていたことを示唆する『魏略』の秦開関連記事（原史料は散逸し、『三国志』の注に引用されている）が、『史記』匈奴伝の秦開関連記事にもとづいて後から創作された伝承であると述べている（本書168頁）。しかし、「魏略曰く、（中略）燕乃ち将秦開を遣わして其の西方を攻め、地二千餘里を取る。満番汗に至りて界を為し、朝鮮遂に弱し。」（『三国志』魏書卷三十、烏丸鮮卑東夷伝、韓、注）と「其の後燕、賢将秦開有り。胡に質と為り、胡甚だ之を信ず。帰りて襲破し東胡を走らす。東胡卻くこと千餘里。」（『史記』卷一百十、匈奴列伝）という二つの記事を、前者が後者をもとにして創作されたものと何故断定できるのか疑問である。単に同じ秦開という人物の事蹟であることと「二千餘里」と「千餘里」の共通点にもとづく解釈であるとしたら、その根拠は確実なものとはいえないであろう。なお、本書の原型となった〔矢木2008〕にも『魏略』の秦開関連記事が引用されているが、そこではそれが『史記』匈奴伝にもとづく創作であるという解釈は示されていない。著者は〔矢木2008〕から本書までの間にそのように考えるに至ったものと思われるが、その理由についてももう少し説明がほしかった。

（一九八二～八七年、上海、地図出版社）、『中国歴史地図集釈文匯編・東北巻』（一九八八年、北京、中央民族学院出版社）などにも多くの面でその研究成果が受け継がれている。拙著の記述などはその糟糠を嘗めているにすぎない。

とはいえ、池内宏に代表される戦前の日本人学者の研究姿勢は、戦後、いわゆる「満鮮史観」として強く批判されることになった。かれらは「満洲」と「朝鮮」とを一体として捉え、朝鮮における歴史展開の独自性を過小に評価するとともに、満鮮一体を唱えることで、結果として日本による大陸侵略を歴史学の立場から後押しした、というのである。

なるほど戦前の研究者の著作には、一定程度、時代的な制約が加わっていることは当然であろう。しかし、「朝鮮史」を朝鮮半島の枠組みのなかに閉じ込めてしまった戦後世代の朝鮮史研究者にとって、かれらの残した膨大な学問的成果を批判的に継承し、これを真の意味で乗り越えていくことは、なかなか容易なことではない。（本書278頁）

筆者が「拙著の記述などはその糟糠を嘗めているにすぎない」と書いているように、本書は「満鮮史」研究の成果を存分に利用している。例えば高麗時代の尹瓘が女真人と戦った際に獲得した「九城」の領域について、現在の韓国では様々な議論がなされているが、著者はそれらについて何も言及せず、「我が国の津田左右吉（一八七三～一九六一）や池内宏（一八七八～一九五二）は、尹瓘の設置した「吉州」を朝鮮時代の「吉州」に無批判に結びつけることを退け、いわゆる「九城」の領域が、畢竟、咸興平野の一带にすぎないことを論証した。（本書116頁）」または「いわゆる「九城」の領域については、これを咸興平野の一带とみなす池内宏（一八七八～一九五二）の説が、今日では通説として広く受け入れられている。（本書193頁）」と述べ、基本的に池内宏氏の「満鮮史」研究の成果に依拠して自説を展開している。このような点からも著者が「満鮮史」研究の成果を高く評価していることがうかがえる。

「満鮮史」とは、その名のとおおり、満洲（中国東北部）史と朝鮮史をひとまとめにした歴史体系であり、戦前・戦中における日本の東洋史研究におけるメジャーな研究分野であった。「満鮮史」は1908年に南満洲鉄道株式会社（満鉄）東京支社内に満洲と朝鮮の歴史地理を研究する調査部が設立されたことによって誕生した。主任の白鳥庫吉のもとに、稲葉岩吉、箭内互、松井等、池内宏、津田左右吉などの研究者が集まり、その研究成果は1913年に『満洲歴史地理』二巻、『朝鮮歴史地理』二巻として公刊された。1915年に満鉄の歴史調査部が廃止されると、その研究事業は東京帝国大学に移管され、その後1941年に至るまで『満鮮地理歴史研究報告』十六冊分の研究成果を生むことになった。しかし、1945年の敗戦によって満洲国が崩壊し、朝鮮が解放されると「満鮮史」はその存立基盤を失い、衰退した。

満洲と朝鮮という二つの異なる地域が、「満鮮史」として一体の歴史空間として把握されたのは、何らかの客観的な根拠によるものというより、日本の大陸政策の必要性による部分が大きかった。そのため、戦後になると朝鮮史の側から「満鮮史」に対する批判がなされた。特に戦後日本の朝鮮史研究を牽引した旗田巍氏は、「満鮮史」が朝鮮史の自主的・主体的発展を否定し、朝鮮史研究に歪みをもたらしたと批判した⁵。戦前・戦中の日本人による「満鮮史」研究を批判する一方で、旗田氏は朝鮮人による朝鮮史研究を重視し、次のように述べている。

もともと、朝鮮には、歴史研究の古い伝統があった。国家的事業として歴史編修がひろくおこなわれたほかに、学者の手による歴史研究も、ふるくからすすめられていた。とくに、一七世紀に実学がおこってからは、その派の人びとによる朝鮮史研究がさかんになった。李暉光（芝峰）・韓百謙（久庵）・李瀾（星湖）・安鼎福（順庵）・丁若鏞（茶山）などは、多方面の研究をするなかで、自国の歴史にふかい関心をそそぎ、すぐれた業績を示した。これら実学者の研究をふくめて、朝鮮における歴史研究の伝統を知ることが、朝鮮史研究の重要な一課題であるが、残念ながら、まだ十分にやられてはいない。とくに、日本人にとっては、まったく未開拓の分野である。（〔旗田 1970〕 27 頁）

旗田氏は、朝鮮人を主体とし、朝鮮の独自の・主体的な発展を明らかにするような朝鮮史研究の確立を目指した。それゆえに戦前の日本人による「満鮮史」を批判し、朝鮮人自身による朝鮮史研究の伝統を重視した。それに対して本書は、朝鮮側の伝統的な歴史研究を批判的に検討し、それらが現在の「自国中心の歴史認識」の基盤になったことを示す一方で、戦前の「満鮮史」研究に対して一定の評価を与えている。本書は旗田氏の「満鮮史」批判とはまるで対照的なスタンスを取っており、この間の朝鮮史研究をめぐる状況の変化がうかがえる。

このような変化が起こった理由は、韓国人自身による韓国史研究がすでに十分に発達し、韓国のナショナリズム的傾向を帯びた歴史観が「竹島問題」や「高句麗論争」など他国との軋轢を生むという問題点が明らかになったためであろう。

「高句麗論争」を契機として、戦前・戦中の「満鮮史」について詳しく検討した井上直樹氏は、「満鮮史」に様々な問題点があることを十分に認めながらも、その有用性を次の

5 旗田氏の「満鮮史」研究批判が戦後の朝鮮史研究を一国史的枠組みの中に閉じ込めたと指摘されることがしばしばあるが、旗田氏本人は一国史的枠組みを必ずしも正しいと考えていたわけではない。例えば北朝鮮の社会科学院が刊行した『朝鮮文化史』に対して、その一国史的方法を指摘し、日本人研究者は北朝鮮歴史学界の一国史的方法をそのまま受け入れるのではなく、朝鮮文化をアジアの中で考えなければならないとして、一国史的観点に陥る事を強く戒めている。（〔旗田 1969〕 222 頁）

ように述べている。

このことは高句麗史研究において、現在の国境ではなく、より大きな観点から高句麗史を理解することが必要であることを端的に示しているといえる。

それならば、問題を多数内包しているものの、中国東北地方と朝鮮半島を区別することなく、一体的な歴史地理的空間として高句麗史を把握しようとする満鮮史的視座は、高句麗の史的展開過程を考究する上で、有効な視角の一つとおもわれる。それは高句麗の動向を今日の国家という枠組みを超えて巨視的に理解しようとする試みの一つでもある。今日の高句麗史研究が国境を基準とする一国史的史観にとらわれ論及された結果、冒頭で示したようにさまざまな問題を惹起していることを想起すれば、満鮮史的視座は一国史的史観を克服するものとして、再度、考究される余地があってもよいのではないかと考えられるのである。（〔井上 2013〕 229～230 頁）

井上氏は、「満鮮史」の対象は高句麗の存在のみを根拠とする歴史地理的空間であり、高句麗史研究に限って言えば「満鮮史」的視座が一国史的観点を克服するために有効であると考えている。戦後朝鮮史研究の一国史的観点からの脱却のために「満鮮史」的視座の再評価を求める動きは、ひとり高句麗史研究のみならず、近代史研究においても重視されてきている。例えば、田中隆一氏は植民地朝鮮と「満州国」との相関関係を分析する中で次のように述べている。

かつて旗田巍は、朝鮮史を大陸勢力の朝鮮半島における波動にすぎないとみなす戦前の「満鮮史」研究を「ゆがめられた朝鮮史像」であると厳しく批判し、「朝鮮史を朝鮮民族の主体的発展」としてとらえる歴史認識こそが「正しい朝鮮史像」であると主張した。たしかに戦前の「満鮮史」研究が、日帝下の朝鮮人の民族意識を押さえ込む役割を果たしたことは事実であり、そのかぎりでは旗田の批判は全く正当であると言えることができる。

しかしながらその結果として、戦後の朝鮮（近代）史研究は「一国史」的な色彩の強いものとなり、在満朝鮮人史研究などを除けば、「満州（国）」史研究との相互関係は省みられることが少なかった憾がある。（〔田中 1996〕 106 頁）

このように戦後朝鮮史研究の一国史的観点に対する反省から、戦前の「満鮮史」研究に対する再評価の動きが近年盛んになってきている。たしかに、「満鮮史」は朝鮮と満洲との国境線を相対化するものであり、一国史的観点からの脱却という点では参考にするべき内容を含んでいる。しかしながら、井上氏が「だからといって、私は戦前日本の満鮮史研究を復活させようとは考えていない。繰り返し述べてきたように、戦前日本の満鮮史研究は、

日本の朝鮮・満州支配を前提としたものであったからである。（〔井上 2013〕231頁）」と述べるように、「満鮮史」をそのまま現代において復活させることは不適当であろう。何故ならそれは、旗田氏が指摘したように、朝鮮史の自主的発展を過小評価する傾向があったからである。そのような傾向は単に研究者の姿勢のみならず、実証的と見なされている研究成果の中にも見られる⁶。

現代の朝鮮史研究者が戦前の「満鮮史」研究から受け継ぐべきものは、その一国史的観点にとらわれない視点であろう⁷。その反面、朝鮮史の自主的発展を過小評価するような部分については、実証的な研究論文のレベルに至るまで、批判的に再検討していく必要がある。もちろん実証的な研究論文の再検討は容易なことではない。しかし、「満鮮史」研究の成果物である研究論文の批判的再検討無しに、「満鮮史」研究者の思想や背景を批判するだけでは、本当の意味での「満鮮史」研究の克服・批判的継承は不可能であろう。「満鮮史」の研究論文レベルでの再検討は、現代の朝鮮史研究者の共通的課題であると考えられる。

本書は直接的に「満鮮史」研究を扱ってはいないが、「朝鮮人自身による朝鮮史研究の伝統」を検討することによって、それと対になる「満鮮史」研究に関する現代的な課題を浮かび上がらせている。

4. おわりに

以上、本書の内容を紹介しつつ、「満鮮史」に関する現代的課題について筆者なりの考えを述べてみた。本文中で何度も引用させていただいたが、戦前の「満鮮史」研究に関しては最近井上直樹氏の『帝国日本と〈満鮮史〉－大陸政策と朝鮮・満州認識』という本が本書と同じ塙書房から刊行されている。井上氏の著書では、本書で詳しく説明されていなかった「満鮮史」の問題について詳細に扱っており、本書と表裏の関係をなすものである。関心のある方は、本書と井上氏の著書とを合わせて読まれることをお勧めする。

本書は、朝鮮史における民族的系譜意識の変遷と領域意識の変遷という巨大なテーマを

6 例えば「満鮮史」研究の代表的な研究者である池内宏氏は朝鮮王朝の建国者李成桂の祖先にかかわる伝説の大部分を虚妄であると断定している（〔池内 1915〕）。たしかに、池内氏の指摘通り、李成桂の祖先に関する記録の中には事実とは考えがたい記録が混入されている。しかし、それを根拠にして、李成桂の曾祖父李行里と高祖父李安社を架空の人物とまで断定する池内氏の結論は果たして妥当なものであろうか。最初から朝鮮王朝の建国伝説を否定するためにこの論文を書いたのではないかと邪推できるほど、恣意的な印象がぬぐえない。本来ならば池内氏の説の妥当性についても全面的な再検討が必要であるが、そのような研究はいまだに行なわれていない。

7 井上氏はこのような視点を「満鮮史的視座」もしくは「東北アジア的視座」と呼び、高句麗史研究において有用な視点であると考えている。（〔井上 2013〕232頁）

古代から現代に到るまで叙述し、しかもそれを一般書という形で広く日本の読者層に提供したものであり、高く評価したい。筆者も本書を参照しながら、今後の研究活動に役立てていきたいと考えている。

参考文献

（著者名の五十音順）

- 池内宏 1915「李朝の四祖の伝説と其の構成」（『東洋学報』5-2・3）
- 井上直樹 2013『帝国日本と〈満鮮史〉－大陸政策と朝鮮・満州認識』（塙書房）
- 金光林 2004「高句麗史の帰属をめぐる韓国・朝鮮と中国の論争」（『新潟産業大学人文学部紀要』16）
- 桜沢亜伊 2007「『満鮮史観』の再検討－「満鮮歴史地理調査部」と稲葉岩吉を中心として－」（『現代社会文化研究』39）
- 田中隆一 1996「対立と統合の「鮮満」関係－「内鮮一体」・「五族協和」・「鮮満一如」の諸相－」（『ヒストリア』152）
- 旗田巍 1964「『満鮮史』の虚像－日本の東洋史家の朝鮮観－」（『鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢』）
- 同上 1969「『朝鮮文化史 上・下』を読んで」（『日本人の朝鮮観』）
- 同上 1970「朝鮮史研究の課題」（『朝鮮史入門』）
- 矢木毅 2007「朝鮮前近代における民族意識の展開－三韓から大韓帝国まで」（夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』）
- 同上 2008「近世朝鮮時代の古朝鮮認識」（『東洋史研究』67-3）
- 同上 2012『韓国・朝鮮史の系譜 一民族意識・領域意識の変遷をたどる』（塙書房）

【付記】 本稿は2013年7月に朝鮮史研究会の関東部会例会で発表させていただいた内容を増補し、大幅に書き直したものである。例会の席上で非常に参考になるご意見を下さった方々に厚くお礼を申し上げたい。

(NAKANO Kota)